



キャノングローバル戦略研究所（CIGS）
CIGS・スティムソン・センター共催ウェビナー
「新型コロナウイルス（COVID-19）後の
国際秩序の前途」

【要旨】

日時：2020年4月23日 ウェビナー

2020年4月23日、スティムソン日本プログラムはZoomを用いてウェビナーを開催し、新型コロナウイルス（COVID-19）のパンデミックに直面した現在の国際秩序の不確実性に関して議論した。日本プログラムのディレクターである辰巳由紀氏がモデレーターを務め、エレン・レイプソン氏（ジョージ・メイソン大学 国際安全保障プログラム担当ディレクター、スティムソン・センター前所長）、宮家邦彦氏（キヤノングローバル戦略研究所 研究主幹、外交・安全保障担当）がパネリストとして参加した。まず辰巳氏がパネリストを紹介し、視聴者には質問があればQ&Aチャット機能で質問するように指示した。

辰巳氏は議論の冒頭で、新型コロナウイルス後の世界がどうなるかパネリストに尋ねた。宮家氏は、現在のパンデミックに対して悲観的な見通しを示した。パンデミックは何も生み出さず、見境なく破壊するだけである。グローバル化の未来と自由で開かれたルールに基づく国際秩序の展望に対する懸念を表明した。グローバル化は存続するが、移動が減少するため「心（hearts and mind）」のグローバル化は存続しなくなる。経済面でのグローバル化は続くが、パンデミック下では勝者は少なく、排他主義とナショナリズムが根強く残るだろうと指摘した。

レイプソン氏は、宮家氏が述べた意見に概ね賛同したが、パンデミックでも国際秩序にさほど大きな変化は生じないと主張した。パンデミックは地球規模の問題であるにも関わらず、各国の内向傾向は継続し、それが国際秩序の論理を損なうであろう。競争や対立が協力の機会を生むと共に、「システムを作り変えるためのコンセンサス」に対しては大きな疑問が残る。今後グローバルシステムでは中堅国が影響力とリーダーシップを持つ可能性があるとして述べた。

辰巳氏は両パネリストの論点を整理し、システムは「自国民優先」に移行しつつあるものの、サプライチェーンはこれまで以上に統合されつつあると指摘した。辰巳氏はレイプソン氏に、競争、中堅国のリーダーシップ、グローバルサプライチェーンといった要素がどのように交錯しているのか質問した。レイプソン氏は、パンデミックにも関わらず、米国がいかに北朝鮮やイランといったアクターに懸念を抱き続けていることかと述べた。今後も国家安全保障上の脅威は常に存在するが、内向への衝動は「各国が国家安全保障の優先事項をどのように考えるか」を変化させている。レイプソン氏は、各国が他国との統合に疑問を感じ、個別の解決策を求めるようになることに不安を表明した。

宮家氏によると、20世紀初頭にはスペイン風邪、国際連盟の失敗、世界大戦に対処した。歴史は繰り返さないかもしれないが「韻を踏む」可能性はあり、1930年代と同じような政策的過ちを犯す恐れがある。宮家氏は「bi-globalization（二極のグローバル化）」という言葉を考えている。経済ネットワークは二つかそれ以上に分断され、一方は中国、他方は欧米諸国によって代表されるという。絶えず不安はあるものの、米国は豊富な資源と地理により安全策を確保している。対して中国は、国内の政治的対立や資源闘争に多くの対応を迫られている。

辰巳氏がパネリストに対し、米中対立の未来について質問した。レイプソン氏は、米中関係は冷戦時代と比較して論争が多いと指摘した。なかんずく米国は、米中経済関係の論争の場を他の問題の中で均そうしており、新型コロナウイルス流行下での安全保障協力を欠いていることが心配であるとした。宮家氏は、新型コロナウイルスがワシントンでの競争、対立、反中感情を加速させていると述べた。中国の目標は、今後影響力が及ぶ範囲から欧米的な要素を排除することであるとした。

続いて質疑応答に移った。ウィリアム・ジャナス氏が、宮家、レイプソン両氏に対し、国際秩序の供給サイドを満たし比較的良い影響を及ぼすシステムが一時的に現れる可能性はあるかと質問した。レイプソン氏は、地域的な取り組みを通してサプライチェーンが強化される可能性はあると答えた。当然ながら、相互に近密な国ほどより速くサプライチェーンを発展させることができる。宮家氏は、中国が国際貿易で果たす役割はあまりに大き過ぎるの

で排除できないと警告した。

続いてギルバート・ロズマン氏から、日本は米中対立にどう対応すべきかとの質問が出た。宮家氏は、日本の唯一の選択肢は生き延びることだと答え、日本にとって中国は地理的にも政治的にも極めて重要な隣国であり、完全に無視することはできない、何が起ころうと、日本は自衛に関する支出を増やししながら、安全保障と防衛関係を発展させることで中国を抑止する地位を築くだろうと論じた。レイプソン氏は別の論点として、日本が防衛支出を増やすに従い、米国では米国の予算を日本の防衛に費やし過ぎているのではないかという疑問が生じていると指摘した。

古本陽荘氏が、米中関係における日本の役割について尋ねた。宮家氏は、中国は米国との間に緊張が残る限り、日本とより良い関係を築こうとするだろうと答えた。しかし、たとえそのようなことが起きても、中国が日本に譲歩することもその逆も期待できないと述べた。

レイプソン氏は、パンデミック後の国際秩序における中堅国の想定される役割に関するジョン・ジョジン氏からの質問に答えた。クリントン大統領以降、米国はシステム内の他国により多くの責任を負わせる方法を模索してきた。米国は国内問題に追われているため、中堅国がより多くの責任を担うには絶好の機会である。レイプソン氏は、今回のパンデミックは中堅国が前進するにはチャンスだとみていると付け加えた。

ケビン・メア氏から、中国のサプライチェーンへの過度な依存について今後どうなるかという質問があった。宮家氏は、もし中国が普通の国であれば問題ないが、そうではないため、中国への依存には政治的または経済的コストが伴うだろうと答えた。レイプソン氏は、米国は中国の経済改革と成長が政治的変革につながると信じていたが、間違いであったと指摘した。中国はテクノロジーが急速に進歩した時期に台頭してきたので、今後中国がテクノロジーをどのように利用するか両パネリストは懸念を表明した。

伊藤禎則氏が、パンデミック対処のための協調対応として、米国はG7サミットあるいは同様な会合を開催することに一定の役割を果たせるかと質問した。宮家氏は、米国はそうあるべきだが、トランプ政権はそうしないだろうと述べた。レイプソン氏がこれを補足して、トランプ大統領は予測不能な性格のため、二国間関係がどの方向に向かっていくのか評価するのは難しいと述べた。

ジョー・ロス氏から、中国に対処するための費用が効果を上回り始めているのではないかとの質問が出た。レイプソン氏は、米国は何があろうと中国に対処せねばならず、離れて歩くという選択肢はない。なぜなら中国は国際社会で大きな役割を果たしているからだと答えた。宮家氏は、費用と効果について交渉する場合、双方とも49%を手にし、両者がウィンウィンな状況だと信じるまで最後の2%を争うことになるかと付け加えた。

最後にジョン・パラキーニ氏が、パンデミック後の国際システムではロシアとインドの位置づけはどのようになり、日米は二国にどのような対応をすることになるかと質問した。宮家氏は、インドは日米両国と関わり、利益が重複する部分については相互に交流するだろうが、本来日本の同盟国ではないと述べた。一方、ロシアは関係を保つため、今後も日米を悩ませ続けるだろうと答えた。レイプソン氏は、米国にとってロシアは頭痛の種であり続ける一方、インドは緊密な同盟国になるはずだが、先行きが不透明すぎて明確な道が見えないと述べた。

辰巳氏が、参加してくれた視聴者とパネリストに感謝を表してウェビナーを終了した。

以上